

中殿御會圖卷 紙本淡彩 一卷 東京 前山久吉氏藏  
中殿御會圖卷 本紙著色 一卷 帝室博物館藏  
狩野養信摸

## 東寺名寶展覽會

弘法大師入定後千百年に當り各處に催されたる展覽會の一にして、四月五日より同月三十日に互り恩賜京都博物館に於て開催せられたものである。出陳品は名の如く東寺とその塔頭觀智院、寶菩提院及び大通寺の寶藏する歷朝御尊影並御宸翰、繪畫、圖像、典籍、文書、器物類三百有餘點に上り高野山に並ぶ眞言宗の寶庫たるに背かざる資料の豊富を稱すべく、就中繪畫の傳眞言院兩界曼茶羅以下、圖像、典籍、文書に從來殆んど秘襲して世眼の觸れ得ざりし稀觀なるものが多い。今出陳品のうち特に美術に關する主要なるもの若干を選べば左の如くである。(渡邊) (○印國寶)

### 教王護國寺

嵯峨天皇御像 絹本淡彩 額装一幀  
○弘法大師像 絹本著色 一幅 後宇多天皇御宸贊  
○眞言七祖像 絹本著色 七幅 五幅李眞筆空海贊 二幅傳空海筆  
○十二天像 絹本著色 十二幅  
○五大尊像 絹本著色 五幅  
○十二天像 絹本著色 六曲屏風一雙 傳宅間勝賀筆  
兩界曼茶羅 絹本著色 二幅 傳眞言院曼茶羅  
佛眼曼茶羅 絹本著色 一幅  
法華塔 紺紙金泥書畫 一幅 圖中巳年十二月道惠銘  
○八字文殊菩薩及善財童子像 絹本著色 一幅 建武元年弘眞裏書

内外彙報

六觀音菩薩像 絹本著色 五幅  
藥師十二神將像 絹本著色 額装一幀  
弘法大師行狀繪詞 紙本著色 十二卷 畫傳土佐行忠外五筆 詞深守親王外九筆

火羅圖 紙本著色 一幅 紙背永萬二年圖寫銘

五方曼茶羅 紙本墨畫 五枚 紙背ニ治承五年或ハ壽永二年年記及ビ肥後公寛舜摸之覺禪之本等ノ文アリ

太元帥明王像(八臂像) 紙本墨畫 一枚

太元帥曼茶羅 紙本墨畫 一枚 紙背ニ「太元曼茶羅 本云成賢」

請雨經曼茶羅 紙本墨畫 二枚 紙背ニ請雨經曼茶羅云々ノ文アリ

○時繪箱(健陀殺袈裟箱) 一合

○天蓋 木造 一箇

○牛皮華鬘 三枚斷片一箇

○舞樂面 木彫彩色 五面 應德三年並ニ建武二年修理銘アリ

### 觀智院

○閻魔天像 絹本著色 額装一面 傳會理僧都筆  
○十一面觀音像 絹本著色 額装一面 傳基光筆  
○不空絹索觀音像 絹本著色 額装一面 傳鑑眞筆  
妙見菩薩像 絹本著色 額装一面 傳珍海筆  
妙見菩薩像 絹本著色 一幅  
普賢延命像 絹本著色 一幅  
虛空藏菩薩像 絹本著色 一幅  
求聞持曼茶羅 絹本著色 一幅  
兩界曼茶羅 絹本著色 二幅 裏ニ寶永三年修理銘

尊勝曼荼羅

絹本着色 一幅  
寶曆四年修理銘

蘇悉地印契圖

紙本着畫 一卷  
奥二「大唐咸通五年甲申孟夏月中旬有八  
上都東市」更二請納 延喜元年八月五日 矢永郡趙琮錄記

護摩爐圖

紙本着畫 一卷  
「永久元年十二月十四日於圓樂寺寫之 宗範」

請雨經曼荼羅圖

紙本着畫 一枚  
永久五年書寫ノ記アリ

傳法正宗定祖圖

紙本着畫 一卷  
仁平四年七月書寫奥書、寶曆五年修理銘

寶樓閣經法

紙本着畫 一卷  
正安元年覺禪ノ寫本ヨリ書寫、元享二年朱點ノ記アリ

寶菩提院

弘法大師御影

絹本着色 一幅  
傳詮摩法眼筆、天文九年修理裏銘

一字金輪曼荼羅

絹本金銀泥畫 一幅

大通寺

弘法大師像

絹本着色 一幅  
後宇多天皇御宸贊

○善女龍王像

絹本着色 一幅

地藏菩薩像

絹本着色 一幅  
應仁三年裏書

維摩像

紙本着色 一幅

弘基和尚像

絹本着色 一幅  
慈性法親王御贊

## 金戒光明寺炎上

京都市左京區岡崎黒谷町淨土宗四箇本山の一金戒光明寺は四月十七日午後十一時過本堂より火を發し、本堂、大小方丈、庫裡等主要なる建物の大部を焼亡して翌十八日午前三時頃鎮火した。本堂は桁行十三間梁間十二間、大小方丈以下と共に文化頃の建築である。數年前同寺の主要建築物に防火設備を施したと聞くが、火の廻りの早かりし爲に殆んどその用をなさなかつたといふ。寺寶の

大部は取出すに暇なく、唯國寶山越阿彌陀像及び地獄極樂圖は恩賜京都博物館に出陳中であり、又水鏡の御影と稱せらるゝ法然上人畫像は當時奈良帝室博物館に開催中の日本肖像畫展覽會に出陳中なりし爲に全きを得た。(渡邊)

## 名作屏風畫特別展覽會

東京帝室博物館に於ては今春三月以降特別展覽會として建武中興資料展覽會、弘法大師資料展覽會(本誌第二十)を相續いて開催し、また四月十八日より廿九日に至る期間、諸家祕藏の屏風繪八點の特別展覽會を開いた。名家の祕庫に深く藏せられて、之を見る機會の尠い名作を一般に公開する企など寔に有意義にて吾等感謝に堪えぬ次第である。特に今回は點數にして僅に八點に過ぎなかつたが、その陳列配置に意を用ひ、觀者の歩を進むるまゝに、足利時代以降の漢畫系統と大和繪系統との大凡の變遷が看取出来るやうに、時代順に整頓されてあつた。その點近頃行はれる徒に種類のみ多くて、蕪然たる陳列による雑多な展覽會とは自ら選を異にせるものであつた。

列品中で、大橋家所藏の傳雪舟筆花鳥圖屏風(本誌第三)、男爵岩崎家所藏の宗達筆源氏物語關屋瀞標圖屏風(本誌第十)、公爵毛利家所藏の傳光茂筆濱松圖屏風等の名作の稱に適はしい作品や男爵團家所藏の大雅筆樓閣山水圖屏風の如き從來未紹介の作品に接し得られたことはこの上もない欣びとするところであつた。たと全般を通じて、直に所傳の筆者に擬するには未だ疑問の餘地の存すると思はれるものも少數見受けられたが、要するに名品及び未公開の作品を紹介して斯界に貢獻せんとする當局の不斷の盡力には滿腔の敬意を表するものである。因に陳列品目は左の如くである。(菅沼)

花鳥圖屏風	傳雪舟筆	紙本淡彩一雙	大橋新太郎氏藏
濱松圖屏風	傳光茂筆	紙本着色一雙	公爵毛利元昭氏藏
日月櫻楓圖屏風	金地著色一雙	侯爵前田利爲氏藏	
花鳥圖屏風	傳山樂筆	金地著色一雙	侯爵德川義親氏藏